

2007 年 6 月 12 日

早稲田大学アジア太平洋研究センター 国際開発協力研究部会 (International Cooperation Studies)

＊早稲田大学内の方へ＊

本研究会はアジア太平洋研究センターの研究部会として設置していますので、研究会参加費は無料です。

1. 研究代表者

松岡俊二（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授）

〒169-0051 新宿区西早稲田 1 丁目 21-1 早大西早稲田ビル 7 階

Tel.03-5286-1471（研究室直通）、Fax.03-5272-4533（事務室）、smatsu@waseda.jp

2. 研究テーマ

国際開発協力とグローバル・サステナビリティ/社会的能力開発

International Cooperation, Global Sustainability and Social Capacity Development

3. コアメンバー（敬称略）

勝間 靖（早稲田大学）、加藤 宏（JICA）、木全洋一郎（JICA）、黒田一雄（早稲田大学）、
斉藤文彦（龍谷大学）、澤田康幸（東京大学）、庄司 仁（JBIC）、城石幸博（ADB）、大門 毅
（早稲田大学）、田中勝也（広島大学）、丹呉圭一（埼玉大学、前 JBIC）、野上裕生（アジア経
済研究所）、松岡俊二（早稲田大学）、松本礼史（日本大学）、三輪徳子（JICA）、吉田栄一（ア
ジア経済研究所）、和田義郎（JBIC）

4. 目的・趣旨

21 世紀に入り、国際協力や国際開発をめぐる問題状況と研究状況は大きく変化している。本
研究部会は、21 世紀における国際協力や国際開発の問題群の再検討とそうした問題群へのアプ
ローチ（方法論）の研究開発を行う。その際、21 世紀の国際開発協力の主要な構成要素（目的
と手段）は、グローバル・サステナビリティと社会的キャパシティ・ディベロップメントで
あるとの仮説に立つ。本仮説の意味するところは、グローバルに持続可能な社会を形成するた
め、各地域・各国・各社会における社会的能力の形成とその相互支援こそ、21 世紀の国際協力
のエッセンシャルな部分を形成するであろうということである。

20 世紀の 2 度の大戦を教訓とした国際的枠組みは、ブレトンウッズ体制として形成され、い
わゆる IMF/世銀という双子の国際機関に基礎をおく戦後の国際開発レジームが形成された。ま
た、国連システムの形成の中で UNDP などの UNDГ が形成されてきた。さらに、先進国のバイ
の援助組織とその調整機関である OECD/DAC が形成された。

こうした、マルチとバイを包含した国際開発協力レジームは、基本的に先進各国の公的開発
援助（ODA）に基づくものであり、その意味では 20 世紀後半の国際開発協力は開発援助が中
心的な問題であったと言ってもよい。

開発援助を中心とした国際開発協力は、冷戦の崩壊と経済社会のグローバル化の流れの中で、その有効性に疑問が出てきている。地球環境問題をはじめとする地球規模の問題、社会経済発展における企業（FDI）や市民社会（NGO）などの民間部門の重要性（ガバナンスや PPP）、アフリカを中心とした膨大な貧困層や紛争（内戦）・難民の問題などである。また、こうした問題に対して、サステナビリティ・サイエンスや人間開発論、人間の安全保障論などの新たな研究が台頭してきている。

本研究部会は、以上の状況認識の下、21 世紀における国際開発協力のあり方を、グローバル・サステナビリティと社会的能力開発を中心としつつ、幅広い観点から整理・検討し、国際開発協力論の新たな展開を試みる。その際、特に、日本の国際開発協力にかかわる経験やアジアの開発経験に基づく、オリジナルな知識創造（アイデア・コンセプト・モデル）とその国際的情報発信を重視する。また、国際開発協力の研究と教育における大学と実務、政策、市民社会との新たな社会システムの構築可能性についても検討する。

1 年半の期間、10 回程度の研究部会を行い、その研究成果を、2008 年度末に出版する（日本評論社等を予定する。英文での出版も検討する）。

5. 今後の予定（暫定案）

第 2 回：2007 年 9 月下旬	JICA の経験と開発援助研究（and CD）
第 3 回：2007 年 11 月中旬	JBIC の経験と開発援助研究（and CD）
第 4 回：2008 年 1 月下旬	アジアの経験と開発援助研究（and CD）
第 5 回：2008 年 3 月上旬	セクターの経験（環境、教育、保健、農林水産、産業開発）
第 6 回：2008 年 5 月中旬	アジア地域の経験
第 7 回：2008 年 7 月上旬	開発援助研究と安全保障研究、地域研究
第 8 回：2008 年 9 月下旬	日本（アジア）の経験の知識化の課題と方法
第 9 回：2008 年 11 月中旬	研究のまとめ方
第 10 回：2009 年 1 月下旬	最終回：研究の総括と今後について